

實相寺 花園会報

令和三年
十一月一日発行
発行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL087-889-3838
編集発行人
山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第151号

お寺の掲示板

一日、鎌倉円覚寺の横田南嶺老大師がYouTube
法話で「竹密にして流水の過ぐることを妨げず、
山高して豈に白雲の飛ぶことを礙んや」という禅
語を用いて、何ものにも邪魔されない自由自在な
本来の仏心について、子規の俳句を紹介しながら
解説しておられました。

「只秋の空、秋の雲」澄み切った空に、鰯雲が
浮かぶ様子を彷彿とします。心に何か悩みがあっ
たとしても、私達の仏心は妨げられないのです。

見渡すや

只秋の空

秋の雲

正岡子規

達磨忌のご報告

さる10月3日(日)の午前10時より、
達磨忌を開催したところ、26名(内2
名Meo参加)のご参加がありました。
参加者が少なかったのは、コロナだけ
でなく、10月第1日曜という日程的な
影響もあったのかも知れません。

法要後は、住職が達磨の『二入四行
論』についてお話しさせて頂きました
が、正直、準備不足で単なる説明に終
止してしまつたと反省しています。や
はり自分の中を深掘りして、テーマに
関する気づきや感動が無いと「良い話」
は出来ませんね。



お釈迦さまの伝記・仏伝について⑧
 初転法輪でお釈迦様が最初に説かれた中道は、「緩すぎず、厳しすぎず、その中間を行け」という修行に対する姿勢でしたが、これは仏教という宗教の本質に関わる大問題です。

もしもお釈迦様の教えを信じることで幸福になれるのだとしたら、「中間を行け」などとは言わないでしょう。「ひたすらお釈迦様の教えを信じなさい」と説く筈です。何故ならお釈迦様に対する信仰の力が強ければ強いほど、その功德を得られるからです。

しかし、そう言わないのは仏教が、「何かを信仰する宗教ではない」ことを示しています。仏教はあくまでも自分で自分を変えていく、自助努力の宗教、修行の宗教だということです。

このことはお釈迦様の遺言である「自灯明・法灯明」にも現れています。

お釈迦様が亡くなる時、「これから何を抛り所にすれば良いですか？」と問う弟子に対し、お釈迦様は「自らを抛り所とし、私の説いた教えを実践しなさい」と説きました。ここにも「何かをひたすら信じなさい、そうすればあなたは救われます」などと言う話が出て来ません。つまり、お釈迦様が最初に説かれた中道の教えと、最後に説かれた自灯明・法灯明の教えは、見事に一貫していて体系化しています。

ですから一見すると「中道」はそれほど重要な教えであるとは思いませんが、実は仏教の本質を示す、とても重要な教えです。なお仏教には、これとは違う種類の「中道」もありますが、

ここでは省略します。興味がある方は、佐々木先生の動画をご覧ください。

次にお釈迦様が説かれたのは「四聖諦」です。「四つの真理」という意味で、苦、集、滅、道の四つから成ります。

最初の「苦」とは「この世は苦の上になり立っている」という真理であり、二番目の「集」は、苦の原因の真理です。自分の人生が思い通りに成らず、「四苦八苦」するのは誰もが経験することですが、その原因は私達には自分に都合のいいもの求め続ける「渴愛」が有るからです。前半の二つは別に仏教を信じようが信じていまいが、この世の全ての人が経験している真理です。一方、三番目の「滅」は、仏教の教えに従って努力すれば、二番目の苦の原因を減することが出来るという真理

であり、最後の「道」は苦の原因である集を減する具体的な方法の真理です。で、後半の二つは、仏教によって苦しみから逃れたいと、努力する人しか経験できない真理です。

ですからお釈迦様が五人の比丘に、初転法輪でまず中道を説き、次ぎに四聖諦を説いたというのは至極当然でした。何故なら、人生は苦しいと自覚し、その苦しみから逃れようとしていない人に、いくら中道や四聖諦を説いても無意味だからです。しかし、これら四つを辿っていけば、必ず苦しみを減することが出来るという四聖諦の教えは、これまで苦行を続けてきた五比丘にとってはとても判り易い教えでした。

